
虹の架け橋

クルーエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の架け橋

【Nコード】

N2897L

【作者名】

クルーエル

【あらすじ】

これは少女とその仲間達の戦いを描いた物語。3人は戦いの果てに何を得て、何を思うのか。この小説はリリカルなのはStickersの二次創作小説です。必ず前書きをお読み下さい。

前書き

こんにちは、初めまして。

この作品を閲覧していただき誠にありがとうございます。

当作品は物書きの経験など全くない筆者の処女作です。そのためお見苦しい点ばかりだと思いますがご了承下さい。

当作品は妄想を文章にしてみただけの作品です。原作とは違った感じに進みます（一応アンチのつもりではございません）。

主人公結構強いです。絶対無敵というわけではありませんが、徐々に強くなっていく主人公をお求めの方はご遠慮下さい。

また、それなりにグロめな描写も有るかと思えます。あまり激しいものをかけるほどの技量がないため大丈夫かとは思われますが、そのあたりに敏感な方はご遠慮下さい。

作者はしがない学生です。所謂ゆとりっ子なため、文法や漢字の使い方がおかしい箇所も有るかと思えますが、指摘頂ければ直していきたいと思えますのでよろしく願います。

長々となってしまうましたが前書きは以上になります。拙い文章ではありますが、どうぞお楽しみ下さいませ。

レイン＝リンファネル

「そこまで！」

モニター越しに響く男性の声。

それを合図に、私は目の前の彼女の首元につきつけた剣型デバイス「ニーズヘッグ」を外し、バリアジャケットも解除した。

「お手合わせありがとうございました、高町一尉。」

「いえいえ、こちらこそありがとうございました。試験、良い結果が出ると思いますね。」

と、彼女は私に微笑みかけてくれる。だから私も

「はい、ありがとうございます。」

と微笑みを返した。

正直ヒヤヒヤモノだった。

さすがは「エースオブエース」や「白い悪魔」などと呼ばれるだけは有ると思う。

あの砲撃…確かディバインバスターと言っていたあれは反則だと思

う。あまり人のことは言えないけど。

万全とは言えない調子での戦闘テスト、しかも相手が「白い悪魔」だと聞いてこれは落ちるかもしれないと思ったが、何とか及第点は取れそうだ。

「試験結果を発表する。」

そんなことを考えていると、私の試験監督を務めてくれたクロノ「ハラオウン提督が現れた。

今回私が受験したのは少将昇格試験だ。将官クラスからは状況把握力、判断力、指揮能力が問われるため、管理局内では一番の鬼門となっているらしい。

各能力ごとにSSS SS S AAA AA A B C D
E Fと言った形で判定が下される。もっとも、分かりやすくするように+や-を使うのが一般的だが。

「試験結果はこのような結果になった。」

と言いつつハラオウン提督は私に1枚の紙を渡す。

少将昇格試験 判定結果

上の方には関係の無いことがつらつらと書かれているため、一気に下の方へ目を通す。

魔力保有量	S
個人戦闘能力	S+
状況把握力	SS
判断力	S
部隊指揮能力	S+

筆記試験結果 964 / 1000 点

以上から推定される将官としての総合能力 S +
最終的な試験結果 合格

「おめでとう、レイン＝リンファネル一佐。君は今このときを持って時空管理局所属レイン＝リンファネル少将となった。これからも、管理局のために頑張っていこう。」

と、提督は私に手を差し出す。

私はそれに応じ、帰路へとついた。
胸に大きな意志を抱いて。

「必ず、私はやり遂げて見せる。」

以下、現時点での主人公設定です。

レイン＝リンファネル少将

魔力量 S (およそ500万程度)

魔術師ランク 空戦S+

魔力光 虹色

レアスキル

光変換

浴びた光をリンカーコアにて魔力に変換、吸収できる。
変換効率はそれほど良い訳ではない。

光媒介

光を媒介にして魔力を通すことで色々なことができる。
最もレインが利用しているのは光を用いた転移。

使用デバイス

「アイギス」

弓形のベルカ式アームドデバイス。
魔力を込めつつ弦を引き絞ることで魔法を装填、放つ攻撃方法をとる。

カートリッジをロードすることにより虹色に輝く。
弓という武器の特性上、近接戦闘が致命的に苦手なため、接近を防ぐために戦闘中は障壁を張ることが多い。

「ニーズヘッグ」

剣型ストレージデバイス。

主に近接戦闘用ではあるが、たいていの戦闘ではアイギスで十分事足りるため使用頻度は低い。
ただし、レイン最大の砲撃魔法を使用するための必須アイテムであり、莫大な魔力を込められる点を考えるとかなりの性質を持っていることが分かる。

「ウイング」

レイン自作のバリアジャケット拡張デバイス。
見た目はまさに天使の羽。

しかし、飛行中の安定性や敏捷性の向上、光変換の効率上昇、攻撃時の魔力収束の補助などまさに縁の下の力持ちとも言えるデバイス。

魔法

「インターバルビット」

所謂収束弾。誘導性能有り。200発まではチャージ不要でアイギスへ装填及び射撃できるため、遠距離での牽制に向いている。近距離で多数当てるとショットガンようになります。

「レインボーグライダー」

駆け抜ける虹の奔流。

威力的にはデイバインバスターより若干上の火力を誇る。

ただし、バリエーションに乏しくコントロールでの追尾も難しいため、まさに一長一短な魔法。

「レインボーフォール」

空を虹色に埋め尽くし、砲撃の雨を降らすという強烈な広域殲滅魔法。

「ファイナルチャージング」

???

現時点では詳細を書かないでおきます。

本編にて登場をお待ち下さい。

レイン＝リンファネル（後書き）

妄想を形にして書くのはやはり難しいです。キャラ紹介のが断然長くなってしまうましたorz
2日に1度は更新する予定です。

六課出向

無事試験を通過し、少将となった私は色々と面倒な手続きごとに追われていた。

「ふう。書類はこれでおしまい…次は直属の部隊編成かあ…。これはまだ余裕がある…ひとまず一休憩…。」

と、思った時に通話回線が来た。お相手は…クロノ提督だった。

「レイン少将、急な連絡で申し訳ないが、本局まで出向いて貰えないだろうか？君に会いたいという方々が居てね。」

「ええ、書類仕事は終わりましたし、残りも急ぎではないので構いませんよ。今から向かいますのでしばしお待ち下さい。」

それにしても、急に本局からの呼び出し…私何かしたかしら？
そう思いつつも本局へ向かう。

本局に到着し、私は指定された部屋へ向かう。

私に会いたいというのは一体誰でしょう…全く心当たりがない。

コンコンッ

「レイン＝リンファネル少将です。失礼します。」

扉を開けて中へ入る。

「　　ッ！こんにちは、フィルス提督、キール提督、クローベル提督。それにハラオウン提督と騎士カリムも。」

「そんなに堅くならなくともよい。無理を言っ来て貰ったのはこちらの方だからな。」

まさか伝説の三提督からの呼び出しとは思わなかった。ハラオウン提督もかなりの実力者だし、騎士カリムも私と同格の少将。

一体私に何の用事だろう…。私の計画はあの二人にしか話していない。となると私に何かしらの問題があったわけでは無いだろうが…。

「なぜ呼ばれたのか分からない、といった顔をしていますね。実は今日は私達からあなたへ頼みたいことがあってお呼びしました。」

とクローベル提督。

頼み…これだけ堂々たる面々からの頼みとは一体どのようなことだろう。

そう思いつつ口に出して聞いてみる。

「頼み…とは一体どのような？」

「つい最近できた「機動六課」という部隊は知っているだろうか？あの部隊はここにいる我々とリンディ＝ハラオウン提督が後見人となり設立に至った部隊なのだが、新人も多く配属され、いささか戦力的に心配な部分があるのだ。だから君とその直属部隊に「協力者」

として機動六課に力を貸してあげて欲しいのだよ。」

「ふむ…それに関しては分かりましたが、なぜ私か？」

「それは簡単な理由だ。あまり大声で言えることではないが、陸のトップであるレジアス中將が六課のメンバーのことをあまり快く思っていない。だから実質陸のナンバー2となつた君に頼もうと思つてね。」

「なるほど…。」

理由は取りあえず把握した。後見人にこれだけ豪華なメンバーが揃っているならば情報も入りやすい…。今後の私の行動にかなり有利に働くに違いない。

「分かりました、そのお頼みお受けしましょう。ただし、私の直属部隊は2人のみの予定ですがそれでも構いませんか？」

「全く構いませんよ。あなたが居るだけでも十分ですし、あなたが選んだ2人なのですからかなりの実力者なのでしょう？」

「ええ、もちろん。その点は信用して頂いて構いません。それでは明日いっぱい準備し、明後日に六課へ出向します。それではよろしいでしょうか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「急なお願いにもかかわらず承諾して頂いてありがとうございます。今度聖王教会でお茶でもいたしましょう。」

「ええ、お誘いありがとうございます。それでは失礼致します。」

そう言い、私は本局をあとにし、帰路についた。

ふう…まさかこんなことになるとは思わなかったけれど。
そう思いつつ、私達の家に入る。

「ただいま」

「お帰りなさい、レイン。今日は遅かったわね？」

「うん、それについてはあとで話すよ。」

「やっと帰ってきたのかレイン！。さっさとメシにしようぜ？」

暖かい。ここが私の、私達の家なのだと実感する。

「あ、そうそう。二人とも明後日から私の直属部隊員として機動六課へ出向だから。」

「え？」

「ちょっとおい詳しく説明」

「話はあとで！ご飯食べようって言ったのはアンタでしょ」

こうして今日も、私の一日は優しく、暖かく、賑やかに過ぎていく。
これがつかの間の安息なのだと分かっているにも、私はこの瞬間を楽しもう、そう思った。

六課出向（後書き）

1話の訂正をしました（将校 将官）

ネタは浮かんできます。授業中に。

むしろ浮かびすぎてどうしようか悩みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897/>

虹の架け橋

2010年10月12日08時09分発行